

復活に期す夏③ 岩本喜照（常葉学園菊川）

あの日、上がれなかったマウンドへ。

～最も早くスポットライトを浴びた右腕の軌跡



2年前の夏、常葉学園菊川の岩本喜照は1年生ながら県大会準々決勝で静岡市立商を完封。華々しく静岡球界に登場した。しかし、その後は大事な試合でケガ、体調不調があいついだ。大きな期待を受けながらも、もがき苦しんだ岩本の2年間を追った。
（写真・文／『静岡高校野球』編集部）

昨夏、常葉学園菊川は静岡県大会準々決勝で、センバツ出場の静岡を破り、準決勝に駒を進めた。3年ぶりの甲子園へ。夏の本命に勝ったことで、チームのムードは最高潮だった。

しかし、3日後の準決勝・静岡戦。そのマウンドに2年生エース・岩本喜照の姿はなかった。

中学時代、岩本はテレビにかじりついてきた。その画面の中には、甲子園を席卷する常葉学園菊川がいた。常葉学園菊川は2007年にセンバツで優勝すると、その夏はベスト4。翌年の夏には準優勝を果たした。フルスイング野球と、疾風怒濤の走塁は甲子園、そして岩本に衝撃を与えた。

「常葉学園菊川は甲子園で優勝して、準優勝もして。ピッチャーもバッティングも他のチームとは全然違うし、走塁も今まで高校生では見たことがないようなプレーをしていて」。

強烈に憧れて、常葉学園菊川に入学した岩本。浜松南リトルシニア時代に全国大会出場経験はなく、森下知幸監督が岩本を初めて目にしたのは入部してからだった。

「体は大きくて、フォームもすっかりついていて、制球もよかった。これなら試合で作っていきけるかなと思ったんですね」。

その言葉通り、岩本は入部して1週間練習試合に抜擢されると、とんとん拍子に夏の大会でベンチ入りを果たす。初戦の袋井商戦で中継ぎとして初登板、準々決勝の静岡市立商戦では先発マウンドへ。低めに

が岩本を突き動かした。

家族に協力を仰ぎ、食事の量を増やした。丼大盛りを朝2杯、昼2杯、夜は3杯半。食の細い岩本にはかなりの量だった。

オフシーズンにはフォームの改造にも着手した。体力がついたことで、従来よりもステップ幅を広げた。入学時から6センチ伸びた身長を生かし、角度をつけることも取り組んだ。スリークォーター気味だったフォームが、下半身を使えるようになったことで、完全なオーバースローになった。

必死に練習に取り組む岩本の変化は森下監督の目にも明らかだった。

「素質のある子は一生懸命にやる子が少ない。岩本もそうだった。投球には研究熱心だったが、気持ちが前に出てこない。しかし、ここ最近、変わってきたんですよ。年明けぐらいからかな。自分が引張っていいくつという気持ちが出てきた。もつともつと出てきてもいいかとも思います」。

後輩にもどんどんアドバイスを送る。試合中の心がけからフォームまで。今まで上級生に教えられてきたことを、今は自らが下級生に伝えている。

冬を越えて、自らの成長も感じた。「相手や、自分の調子に合わせて、三振も取れる、打たせて取ることもできる、そういう投手になりたいし、なってきたと思う」。

* * *

「自分が投げないから申し訳ないっていうのが一番あるんですけど、ピッチャーがど

伸びるストレートを思い切りよく投じて、結果は3安打完封。岩本は一気に脚光を浴び、静岡高校球界もニューヒーローの登場に沸いた。

決勝戦にも中継ぎで登板したが、常葉学園に敗れ、甲子園出場はならなかった。「今思えば、決勝も先発したかったですね」。

甲子園が始まり、テレビの中では同じ1年生の宮崎悟（常葉学園橋）が甲子園のマウンドを踏んでいた。羨ましく思ったが、岩本の視線はすでに秋をたらえていた。

その秋は、県大会準々決勝で静岡と対戦。後にドラフト候補にも挙げられたエース・野村亮介（現三菱重工横浜）を擁する静岡に接戦の末、2-4で敗北した。がっぷり四つに組み合せて投げ合った印象だったが、岩本本人は、はっきりと差を感じたという。「野村さんはレベルが違った。言葉で言うのは難しいんですけど、雰囲気や堂々としたところとか、全然違いました。それが冬に頑張ろうというきっかけになりました」。

岩本は目標を得た。静岡、そして野村に追いつきたい、追い越したい。しかし、その気持ちが空回りしたのか、その試合以降、岩本はスランプに陥った。

「最悪でした。全然球もいなくて、ストライクを投げたら全部打たれるイメージがありました。フォームもバラバラで。原因はわからなかったです」。

今までの高校生活の中でも一番苦労したという不調を抜けだしたのは翌年、2年の春のことだった。地区大会を勝ち抜き、県



◆岩本喜照【いわもと・きしょう】
1995年3月3日生まれ、静岡県掛川市出身。187cm74kg、右投右打。最速140キロを内外に投げ分ける長身右腕。

れだけ大事かっているのは改めて感じました。試合の8割9割ピッチャーじゃないですか。自分がマウンドに立って、自分次第でチームの勝ち負けが決まる。責任がありますよね」。

岩本が投げていれば、と今まで幾度も言われてきたことについて聞くと、そんな返事が返ってきた。投手というポジションの重みを十分に味わってきた高校野球生活。まもなく、終わりを迎えることになる。

「先輩にも恵まれて、1年の最初から色々経験させてもらって。2年の時には調子が悪かった時でも打って勝ってくれたり。3年の夏は今までの集大成。今までの経験を全部出したいですし、この野球部の中で一番経験させてもらってる自分が、率先して中心となってやっていけば甲子園に行けると思います」。

鮮烈なデビューを果たした夏から2年がたった。静岡の3年生の中で最も早くスポットライトを浴びた岩本の最後の夏が、まもなく幕を開ける――。

小1	父の影響で野球を始める
中3 夏	浜松南リトルシニアで県準優勝
高1 春	憧れの常葉学園菊川に入学する
夏	県大会準々決勝・静岡市立商戦で完封。一躍脚光を浴びる
秋	静岡・野村亮介と投げ合い、レベルの差を痛感
冬	最大のスランプに突入
高2 春	県大会優勝するも、ケガで東海大会には出られず
夏	静岡を倒すが、体調不良で準決勝・静岡戦はベンチを外れる
秋	夏のショックを引きずり、県大会準々決勝で静岡に完敗
高3 春	県大会準々決勝で再び静岡に敗北
夏	？

試合は息詰まるような接戦になった。2-2のまま延長戦に突入するかと思われた

大会でも優勝。東海大会出場が決まった。しかし、東海大会直前の練習試合で岩本は人差し指を打撲。マウンドに立つことはなく、常葉学園菊川は1回戦で三重のいなべ総合学園にコールド負けを喫した。

県大会を全試合完投で勝ち抜き、東海大会で投げることを楽しみにしていた岩本は大きなショックを受けていた。

故障自体は大したものではなく、気持ちに区切りをつけてからは夏の大会に向けて順調に調整が進んだ。

県大会が開幕すると、常葉学園菊川は順当に勝ち上がり、準々決勝で、前年秋に敗れた静岡と対戦。野村はセンバツを経験し、静岡県では抜きんできた存在になっていた。「絶対に勝ちにいくつもりでした。先輩たちも最後だったし、秋に負けてから、静岡に勝つことを目標にしてきたんで、リベンジしたいという気持ちがありました」

この試合の話になると、岩本の顔が翳る。「悔しくて、秋まで引きずりました。自分の意識が足りないというか、ケガの予防とか、体調不良とか自分の責任なので」。

大会を終え、3年生が引退し、チームが秋に向かっても、岩本は夏に残されてきた。3年生たちがグラウンドに顔を出すたびにありがたさと、申し訳なきが交差した。

一気にチームの顔ぶれが変わり、岩本以外のチーム全員が入れ替わって挑んだ秋。岩本は3年生への葛藤、そして自分がチームを引っ張るという責任感に、もがき続けていた。夏を引きずり、気持ちの部分で負けていたのかもしれない。県大会準々決勝で静岡に大敗し、2年の秋は終わった。

このままじゃいけない。湧きあがる思い